

街道・宿場・湊 二  
**中山道 醒井宿**

米原町醒ヶ井

◆醒井宿の概要

醒井宿は、江戸時代には中山道六十七宿の内、江戸より六十一番目の宿場です。江戸時代初期は幕府の直轄地でしたが、享保九年（一七二四）以降は、大和郡山藩（柳沢家）の領地となりました。宿場の規模は、『中山道宿村大概帳』によると天保年間（一八三〇～一八四四）、宿の長さは南西八町二間（約〇・八七km）、宿高五百二十八石、家数百三十八軒、人口五百三十九人、本陣一軒、脇本陣一軒、旅籠屋十一軒、問屋場七カ所が存在しており、中山道では中規模に属するようです。本陣は今ではなく、現在は「本陣樋口山」という料亭があり、その料亭内に大名が宿泊したときに掲げられた関札が陳列しています。

◆問屋場（町指定）

醒井宿には宿場を通行する大名や役

人に人や馬の提供、荷物の積み替えなどの引き継ぎを行う問屋が今も当時のまま残っています。享和四年（一八〇四）の宿絵図にも描かれ、工法や建築様式から、江戸時代でも古い様式を伝えるものとされています。現存する問屋場の建物はほとんどなく、全国的にも貴重な建物です。



問屋場

◆醒井宿資料館（国登録文化財）

大正時代に建てられた木造二階建ての擬洋風建築です。旧醒井郵便局の局舎であったものを改修し資料館として活用しています。醒井宿の歴史や、庄屋などを勤めた江籠宋左衛門家の資料を紹介しています。



柏原宿散策マップ



醒井宿資料館

◆六軒長屋（六軒町）

享保九年以降大和郡山藩となった醒井宿は、西の彦根藩との境界を明示するために、六軒の茶屋を建てたことがその始まりとされ、六軒町と称されています。現在では一件だけが残っています。

◆居醒の清水

醒井宿は、地蔵川の清流に潤された特色ある宿場です。その中の一つに、日本武尊ゆかりの居醒の清水があります。『古事記』や『日本書紀』によると、日本武尊が伊吹山の荒神征伐に向かった際に、白猪（大蛇）に化けた荒神が大雨（毒）を降らせたため、日本武尊が正気を失い、やっとのことで下山した近くの泉で体を冷やしたところ、正気を取り戻したとあり、それがこの

居醒の清水であるとされています。



居醒の清水

◆三水四石

中山道の名所を紹介した『木曾路名所図会』に、居醒の清水、十王水、西行水の三水と、日本武尊腰掛石、日本武尊鞍懸石、蟹石、影向石の四石が紹介されています。十王水は、十王の文字を刻んだ石灯籠あたりから湧き出ている泉。西行水は、十王水の西約百mの山裾あたりから湧き出ている泉。その岩の上に泡子塚という石塔があります。これは、西行法師が茶店で飲み残した茶の泡を娘が飲んだところ、懐妊し男の子が生まれた。それを聞いた西行法師は、「汝、我子なら元の泡に

かえれ」といったところ、たちまち元の泡になってしまったという伝説が残っています。日本武尊腰掛石、日本武尊鞍懸石は、日本武尊が腰掛けた石と馬の鞍を置いた石。蟹石は、美濃国から持ち帰ろうとした巨蟹を居醒の清水に放したところ石になった伝説。影向石は、醒井の加茂神社の神霊が影向した石、と伝えられています。



醒井宿散策マップ